

「個」が帰る場所

坂田三允（長野県看護大学）

ホームドラマがテレビから消えてしまったのは、いつ頃だろう。といっても、私はあまりテレビのドラマを見ていないので、ホームドラマというものが一体どういうものなのか、よくわかっていないわけではない。ただ、少なくとも、いま流行のトレンドドラマをホームドラマとはいわないだろう。彼らには生活がない。恋をして悩みはするものの、結婚にこぎつけたらドラマは終了だ。子育ての苦労も、共稼ぎの苦労もない。年老いた両親の世話をどうしようと考え、夫婦の微妙な意見の違いから生じるさざなみもない。そこでは、「ホーム」は崩壊する以前に作られてもいないのだ。

こんなことを考えるのは、たぶん私が夢を見てはいられないほど年をとってしまったせいなのかもしれないけれど、おそらくホームドラマというものは卓袱台^{ちやぶ}の世界なのだと思う。しかし、いまや卓袱台はダイニングテーブルに代わった。卓袱台は家族みんなが集まる場所だった。でも、ダイニングテーブルは食事を食べるところにすぎない。テレビは一家の宝物ではなくなり、チャンネル争いもなくなって、私たちは「個」なるものを手に入れたようだ。それでは、個である私にとって「ホーム」とは、どんな意味を持つものなのだろう。

この本『I'm Home』は、正月用の餅を火鉢で焼いていて一酸化炭素中毒になり、身体は回復したもののここ数年間の記憶を無くしてしまった家路^{ちやぶ}（なんとお手軽な命名！）が「自分」と「家族」を捜す心の旅を続けるコミックであ

る。週刊文春の書評で知り、読みたいと思って閉店間際の書店に駆け込んで、手に入れたのだった。上巻の帯封には「あなたの帰る場所はどこですか…？」と書かれており、下巻には「あなたを迎えてくれる人は誰ですか…？」とある。

記憶のない数年間の間に離婚し、再婚している家路にとって、現在の妻や子は見知らぬ人である。「ひとつも共通の思い出話ができてなくてそれで…平気かな」とたずねる家路に、妻はこう答える。

「夫婦なんてもともと、他人じゃないですか。ただ一緒にいるだけで、何もかも分かり合えるなんて思っている人がいたらその方がよっぽど不思議です。」

家路は考える。

「家族だと思わないで暮らすことならできる…。ただ同じ家に暮らすということだけなら…」

この本にはさまざまな家が登場する。思い出した家、アイジンの家、親の住む家、友人の家、義妹の家、赴任先の家、山の家、高木の家。でも、これらの家は、家路にとっての居場所にはならない。ホームは、単に人を入れておくだけの入れ物ではないのだ。個と個のかかわりが存在する空間、あるいはかかわりそのものの。私の帰る場所、私を迎えてくれる人たち。思い出のつまったところ、そして私の居場所。

夜遅くコンビニエンスストアにたむろする若者たちは、帰るべき「ホーム」を持っているのだろうか。ふと、そんなことを思った。 ▲



さかた・みよし

千葉大学看護学部助手、東京大学医学部附属病院（精神科婦長）を経て、1997年より長野県看護大学教授。日本精神科看護技術協会第二副会長。著書も多いが読書量も多い。しかもその守備範囲は広く、専門書からコミックに至るまで。特に好きなジャンルは推理小説とのこと。